

全日本実業団が10倍面白くなるコラム⑥
五輪3大会連続代表の福島が出場
スプリントの女王が現役続行未定の理由は？

文：寺田辰朗

リオ五輪の福島千里（北海道ハイテクAC）は100mを欠場して200mに絞った。直前のアメリカ合宿中に左太もも裏に違和感が出てしまったからだが、9組2着プラス6の予選を通過することはできなかった。その状況でも23秒21の国外日本人最高タイ記録を出すことができたのは、スタッフを含めた“チーム福島”が最善を尽くした結果といえるだろう。



だが、目標としていたのは世界で戦うこと。予選落ちは「ただただ、悔しさの残る結果」だった。今季で28歳。来季以降のことは「シーズンオフに考える」と言い、現役続行に関しては白紙の状態で全日本実業団に臨む。

とはいえ、どんな状況でも全力を尽くすのが福島千里という選手。スプリントの女王は、高速トラックの長居でどんな走りを見せてくれるだろうか。

●長居競技場と福島

全日本実業団の目標を「良い走りをして優勝すること。先輩の北風さん（北風沙織。今季いっぱい現役を引退）と同じユニフォームを着て走るの是最後かもしれないので、ワンツーフイニッシュを目指します」と話す。

長居競技場については、「あまり良い思い出がないんです」と言う。優勝を目標にしていた高校3年時（06年）の大阪インターハイでは、100m 2位、200m 3位と敗れた。翌07年の日本選手権は100m決勝で肉離れ。8位（12秒87）に沈んだ。12年の日本選手権は2種目に優勝したが、記録への意欲が下がっていた時期で、「勝てば良い」という姿勢だったことを悔やむ。



だが、10年の大阪国際グランプリ100mでは2位。五輪200m金メダリストのヴェロニカ・キャンベル・ブラウン（ジャマイカ）には敗れたものの、11秒27を向かい風0.1mの中でマークした。9日前の織田記念100mで11秒21、5日前の静岡国際200mで22秒89と日本新を連発した直後だった。織田記念は追い風1.7m。大阪グラン

プリの11秒27は、客観的には高く評価された。

その前年の09年大阪グランプリでは、2走を走った4×100mRで43秒58の日本記録も樹立した。長居で好記録を出していないわけではないし、インターハイ、日本選手権など競技人生の節目となる試合も走っている。

福島が「良い思い出がない」と言うのは、「1つの試合で自分が変わったわけではない」、という考え方が強いからなのかもしれない。

●女子短距離で突出した存在

福島は08年に11秒34の日本タイを出し、将来性も加味されて同年の北京五輪代表に選ばれた。予選落ちではあったが、日本選手の子女子100m出場

は 56 年ぶりの快挙。そして翌 09 年、10 年と 2 種目の日本新を連発し、11 年のテグ世界陸上では、世界陸上女子短距離種目初の準決勝進出を両種目で果たした。

快進撃を支えた福島が一番の武器が、スタートダッシュとすることに異論は出ないだろう。スピードスケートのように低い姿勢で、滑らかに加速する。さらに中間疾走も、軸がぶれず上下動も極めて少ない。前半型でありながら、200m も走りきることができた。各種測定では、地面反力を瞬時にとらえる能力が高い数値が出た。

ところが、ロンドン五輪イヤーの 12 年は頻りに痙攣が起きていた時期で、前述のように国内では「勝てばいい」と考えてしまった。これは「つねに記録を狙う」という自身の姿勢と異なることだった。ロンドン五輪本番も、両種目ともいいところなく予選落ち。

「どうやってリオに向かっていけば良いのか、わからなくなっていました」

だが、福島はそこで終わらなかった。14 年に立て直しの兆しを見せ、昨年の北京世界陸上では予選で 11 秒 23 の自己セカンド記録。2 度目の準決勝進出を果たした。そして今年の日本選手権では 200m で 22 秒 88 と、6 年ぶりに日本記録を更新してみせた。

「ロンドンの頃は練習が、点と点になってしまっていました。その後も結果が出ない時期が長かったですけど、失敗も無駄だったとは思いません。昨年あたりから、必要なトレーニングが見え始めましたから」

絶好調で乗り込むはずだったリオ五輪は、冒頭で記したように直前で違和感が生じるアクシデント。だが、リオ入り後もあきらめずに調整を続け、メンタルは完璧に仕上げられた。

「脚が痛いから 100m をやめたのではなく、200m で結果を出すために、積極的な戦略として 200m に臨みました。最後は“楽しみ”だと思えることができましたし、そういう状態に仕上げてくれた方たちに、感謝の思いを持ってスタートラインに立てました」

3 回目の五輪でも結果を出せなかった感想を問われ、「まさかではなく、納得しています」と気丈に話すことができたのは、ロンドン五輪から、あるいはそれ以前からの取り組みに悔いがなかったからに他ならない。

●女王を支えてきた意思の強さ

インタビューのおっとりした話し方からは想像できないが、福島を支えてきたのは意思の強さだと断言している。レベル的には差が大きい女子短距離にあって、世界と戦う気持ちを持ち続けた。練習でも、とことん自身を追い込んだ。身体的素質や動きのセンスだけで、ここまで突出した存在になれたわけではない。



だからこそ、リオ五輪のレース後に現役を続けるのか質問されても、回答を保留せざるを得なかった。

「大きな決断になります。この 4 年間をもう一度やれるか、去年や今年の冬期練習をもう 1 回やれるか、と聞かれたら、簡単にやるとは言えません」

北海道ハイテク AC の中村宏之監督は、「東京オリンピックまで大きく見てしまうと大変なので、100m の日本記録更新を目標にしてはどうか」と提案している。今年の福島はシーズン前から、これまでで一番良い状態と中村監督の目には映った。6 年前の日本記録をそのままにしておくのはもったい

ない。

帰国後に再度、福島の意味を確認すると、次のように話してくれた。

「シーズンが終わってから決めます。自己記録（＝日本記録）を更新するために続けるとか、目標を下げてやることはないと思いますが、続けるにしてもいくつかの選択肢があるので、そこも含めてオフに考えます」

日本記録更新は、目標を下げることで、福島がいかに強い気持ちで競技に取り組んできたのかがわかる。

五輪の結果で現役続行を決める選手も多いが、福島は1つの大会の結果で自身の方針を変えるタイプではない。北京五輪だけは例外的に「ターニングポイントではあると思うんですけど…」と言うが、長居開催の06年のインターハイで負けたことや、07年の日本選手権決勝で肉離れをしたことだけで、自身が変わったわけではないと言う。

五輪の結果に自身の取り組みが表れたことは受け止めつつ、結果よりも取り組みの過程そのものを直視して判断する。その傾向が大きい選手なのだ。

近年の女子短距離で話題になるのは、福島に続く選手が育っていないことだが、後輩の成長を促す意味で少しでも長く現役を続ける、という考えは持っていない。

「でもリオ五輪を見て、今の福島なら勝てる、そう思って挑んでくる選手がいたらいいですね」

3回のオリンピック（個人種目）を1人で戦ってきた福島が、後輩たちの奮起を望んでいないわけがない。